

令和4年度サロベツタンチョウ報告会

～渡るサロベツのタンチョウ～

日時： 2023年2月26日(日)13:30-15:30

会場： サロベツ湿原センター + オンライン
(北海道天塩郡豊富町上サロベツ8662番地)

内容： サロベツのタンチョウの渡りと新たな越冬地に向けた取り組みに

<講演>

13:35-13:55 「タンチョウ生息地の分散と渡り」
NPO法人タンチョウ保護研究グループ 百瀬邦和

13:55-14:30 「サロベツの標識個体の渡り」
NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク 長谷部真

<現地報告>

14:30-14:40 「サロベツからの越冬個体の観察報告」
日本野鳥の会道北支部 村山良子

<対談>

14:40- 「タンチョウの新たな越冬地に向けて」
対談者：長谷部真・村山良子 コーディネーター：百瀬邦和

共催： NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク

NPO法人タンチョウ保護研究グループ

協力： 日本野鳥の会道北支部

この会は経団連自然保護基金の助成を受けて実施しています。

講演要旨

タンチョウ生息地の分散と渡り

NPO 法人タンチョウ保護研究グループ 百瀬邦和

・生息地の分散の現状

北海道におけるタンチョウの生息は1930年代に釧路湿原で再発見されてから30年程は釧路地方、そしておそらくは根室地方の一部に限られていた。冬の給餌等の効果によって生息数が増加してきたのを反映して、1970年代には十勝地方沿岸部、そして国後島を含む根室地方の広い範囲に生息地が広がり始めた。オホーツク地方でも1980年代には沿岸湖沼で生息が確認されるようになり、1990年代後半からは継続して繁殖が確認されている。道北地域への定着は2002年のサロベツ湿原が最初で、以後オホーツク海側の枝幸町までの沿岸湿原に分布を拡大している。道央地方では2011年に日高西部から胆振東部にかけて1つがいが定着して以降つがい数が増加している。各地の生息数の現状は、繁殖つがい数では釧路地方で全体の70%強、十勝地方で約20%、オホーツク・道北・道央地方を合わせて10%弱ということになる。タンチョウの繁殖地は釧路地方で山間地を除くほぼ全域に及び、十勝地方も新得町・鹿追町・陸別町など十勝川本支流の上流部まで、南西部では日高山脈に接する付近まで広がり、両地方ともほぼ広がり尽くした感がある。オホーツク地方では斜里町から紋別市に至る沿岸湖沼群のほぼ全てに記録があり、現在も毎年新しい情報が届いている。道北については昨年の報告会(サロベツ・エコネットワーク主催)での報告によれば、沿岸5市町村を合わせて既にオホーツク地方とほぼ同規模のつがい定着しているようであり、天塩川などさらに南部へ広がる兆しがある。道央地方では中央低地帯の太平洋岸からウトナイ湖、千歳川流域に繁殖地が点在していて、徐々に増加傾向にある。

一方、越冬分布では釧路地方が依然として全体の90%近くを占め、十勝地方が約10%、オホーツク・道央地方の越冬個体はそれぞれ2桁に届いたところである。道北地方での越冬はまだ記録されていない。

・各繁殖地域に生息するタンチョウの移動

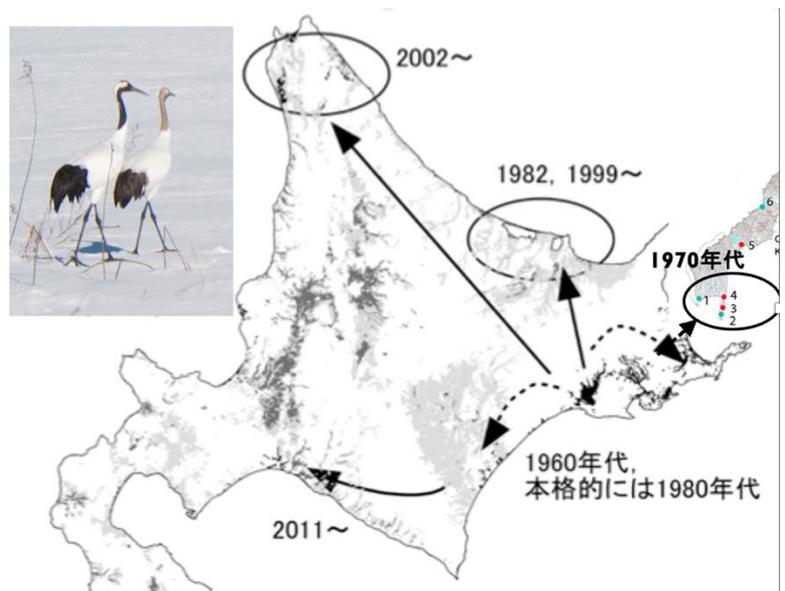
十勝を含む道東地域で繁殖しているつがいは、依然として主に釧路地方の集団越冬地(釧路市音別町、同阿寒町、鶴居村、標茶町)に移動して越冬するものが多いが、繁殖地付近に留まるか、地域内を小規模に移動し小さな集団を作っている例が増えてきている。かつてオホーツク地方での越冬記録はなく、少数の標識個体からの情報から、ほぼ全ての個体が釧路あるいは十勝地方で越冬していると見られてきた。近年少数個体の越冬が継続して観察されるようになってきたが、繁殖地との関係は不明である。道央地方で繁殖しているつがいは、一部繁殖地周辺で越冬するものが見られるが、大半は比較的近い日高地方西部に移動しているようである。これらの移動は全て、宿泊を伴わない一日以内の飛翔で可能な範囲であろう。

・サロベツから道東への移動=渡り？

昨年(2019年)からサロベツ湿原で実施しているタンチョウの調査で、発信機による追跡に成功した2羽には、道北から釧路、十勝地方の越冬地までの移動距離が300km以上と長く、さらに出発した繁殖地に比較的近いクッチャロ湖、興部川で長期滞在をしたこと、その後越冬地に到着するまでに一泊以上していることなどに共通点があり、注目される。これらの様子は、ロシアや中国で繁殖している大陸のタンチョウの渡りの様子と重なるものがある。鳥の渡りについて明確に定義された基準はないが、留鳥とされてきた北海道のタンチョウが道北に分布を広げたことで、渡り鳥としての動きを示し始めたかと解釈できるのではないかと。

・今後の展開

道北のタンチョウが渡りを始めたとすれば、渡りの経路上にある中継地が新たな越冬地や繁殖地となる可能性、また、若い個体が違った方向へのコースを開拓するという可能性も期待できる。道北から日本海沿岸を南下、あるいは内陸部を石狩川に沿って南下するといったコースが想定され、道央の繁殖個体と合流、あるいはさらに南下して道南から本州に向かうというグループが出てくることを期待したい。北海道のタンチョウが自然分散で本州まで分布を広げる際には、こうしたケースが考えられるのではないだろうか。



サロベツの標識個体の渡り
NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク長谷部真

私たちは2021年より経団連自然保護基金の助成を受け、環境省の保護増殖事業の一環として、豊富町で捕獲によるタンチョウの渡り調査を実施しています。無双網を用いて2021年は4羽捕獲し足環を装着、1羽に発信機を装着しました。2022年は5羽捕獲し足環を装着し、3羽に発信機を装着しました。

足環番号426（以下426）は2021年10月に豊富町で捕獲した個体です。426は2021年11月30日に豊富町を出発した後、12月24日まで浜頓別町に滞在し、浜頓別町を出てからは、枝幸町、津別町で1泊ずつし、鶴居村に12月26日到着しました。鶴居村では主に鶴見台の採餌場と周辺の河川をねぐらとして行き来しており、2022年3月18日まで越冬しました。帰りは興部町、枝幸町、浜頓別町に滞在しつつ3月24日に豊富町に非標識のメス個体と一緒にいるところを確認しました。渡り経路は往路・復路で中継地の違いがあるもののほぼ同じ経路でした。残念ながら2022年は繁殖しませんでした。これまでタンチョウの繁殖地として確認されていない場所で夏の間生息していることがわかりました。8月22日に発信機が脱落したためGPSによる位置の追跡ができなくなりましたが、9-10月に豊富町や幌延町のデントコーン畑で足環により姿が確認されました。その後12月21日に2021年と同じ鶴居村の給餌場で確認情報がありました。426に装着していた発信機はまだ使用可能でしたので、新たに捕獲した個体に装着することにしました。

足環番号429（以下429）は2021年11月に豊富町で捕獲しました。426と一緒に行動していたこともあり両方ともオスなので親子かもしれません。429は12月1日までサロベツに滞在していましたが、12月4日には鶴居村で確認され、2022年2月にもいたことがわかっています。4月2日には豊富町につながっているところが確認されました。その後、429は夏の間行方がわからなくなりましたが、9-10月にはデントコーン畑で標識なしメスと一緒にいるところが確認されました。10月24日にタンチョウ成鳥を2羽捕獲し、このうちの1羽が429で再捕獲となりました。この個体に回収した発信機を装着しました。429は11月17日まで豊富町に滞在し、興部町に渡りました。年が明けた2023年も興部町に滞在していたので、このまま越冬するかと思いましたが、1月27日に音更町に渡り、1月29日から浦幌町に移動し滞在しています。

足環番号448(以下448) は2022年10月に429と一緒に捕獲し、捕獲後しばらくは429と一緒に豊富町周辺にいるのが確認されていました。12月20日に幕別町で目撃情報がありました。2021年に豊富で捕獲した個体は鶴居村でのみ確認されたので、十勝地方で確認されたのは429と共に初めてです。

足環番号449（以下449）は2022年10月に捕獲した成鳥2羽と一緒にいた幼鳥でした。親子一緒に捕獲する予定でしたが、成鳥を捕獲できなかったため、家族離散を防ぐためすぐに親鳥の元に戻しました。その後449が親子と一緒にいるところを確認しました。2023年1月7日に鶴居村で確認されそのまま越冬しているようです。

足環番号450（以下450）は足環番号451(以下451)と一緒に2022年11月に捕獲し、足環と発信機をそれぞれ装着しました。残念なことに発信機からの電波は翌日に途切れてしまいました。450は11月17日に429と一緒にいるところが確認されました。酪農学園大学の寺岡教授の研究グループによる血液標本の分析により、429と450はオスであることがわかりましたので、つがいはなくただ一緒にいただけだったようです。捕獲時に451の体重が450より重かったので、450がメス、451がオスとしていましたが、実際には逆でした。450は11月24日に天塩町で目撃情報があり、12月12日には鶴居村で確認されそのまま越冬しているようですが、451の行方は発信機を装着した翌日以降わからないままです。

タンチョウは道東地方で飽和状態にあり、感染症による大量死の危険性があるため、環境省は繁殖地や越冬地の分散を推進しています。宗谷地域周辺は道東に次ぐタンチョウの繁殖地としての潜在性を持つため、私たちは今後も繁殖調査や個体数調査、捕獲調査を行うことにより、タンチョウの生態を明らかにし、保全活動を継続していきます。